

半歩遅れの

読書術

森本 あんり



大学院時代はプリンストンという小さな大学町で、ひたすら中世近世の古い神学を読みつつ5年を過ごした。当時の小さな

息抜きが、ニューヨークへ出掛けることだった。電車で1時間ばかりの距離だが、閑静な田舎から大都会へ出る緊張もあって、引きこもりが現代世界の喧騒に再接続するような覚悟が必要だった。

帰国後も大学関係の出張でしばしばニューヨークを訪れたが、いつも行くのはアップタウンのリバーサイドである。そこ

に、ラインホルド・ニーバーが戦中戦後を通して教えていたユニオン神学校がある。

アメリカの政治家は、国際政治への深遠な洞察力を求めてしばしばニーバーを読む。つい先日、アメリカ軍のアフガニスタン撤退問題について、ニーバーの有名な祈りの言葉を掲げる論説があった。「ブッシュの戦

争」としてオバマ政権が嫌々引き継いだ戦争を20年後に終わらせたのは、当時副大統領だった現大統領のバイデン氏である。

預言者R・ニーバーの容赦なき米国批判

歴史を操作する大国の限界

自ら始めた戦争から手を引くアメリカの姿に、泥沼化したヴェトナム戦争の最終局面を重ねて見た人も多いだろう。

なぜそんな愚行が繰り返されるのか。それは、アメリカが自分の手で世界の歴史を操作できると過信しているからである。

そのことを、すでに70年も前に指摘したのが『アメリカ史のアイロニー』（聖学院大学出版会 大木英夫ほか訳）である。

ニーバーは、2つの大戦と冷戦時代の苦悩を経験し、戦後の国際秩序においてアメリカが果たすべき役割を冷徹に論じた。

昔も今も、政治家たちは「この国を再び偉大にする」と言いたがるが、偶然的な要素で新興国から超大国へと急成長したアメリカにとり、この誘惑は特に危

険である。いわば、成功したからその限界に直面するというオイディプス的な歴史の皮肉が露呈するからである。

学生時代は、同じニーバーでも『人間の本性と運命』といった哲学的で普遍的な著作に惹かれていたが、仕事で苦労するようになり、さらに行政職が続くようになると、前掲書や『道徳

的人間と非道徳的社会』などのように、現実的な課題と直接切り結ぶ著作が深く心に響くようになった。

預言者が王に向かって容赦のない批判を向けるのは、旧約聖書以来の伝統である。さて、ニーバーのような超越的視点を提

供する神学者は、21世紀のアメリカに在るのだろうか。

(神学者)